歴史的集落地の環境評価と持続性に関する基礎的研究

A BASIC STUDY ON EVALUATION AND SUSTAINABILITY OF HISTORICAL VILLAGES

徳勢貴彦*, 鳴海邦碩**, 澤木昌典***, 岡 絵理子****

Takahiko TOKUSE, Kunihiro NARUMI, Masanori SAWAKI
and Eriko OKA

The purpose of this paper is to propose one of the new indexes of the evaluation of villages' environment and directionality, by analyzing the autonomies stuffs' evaluation of the historical villages, and so on.

As a result, autonomies stuffs evaluate especially remaining historical buildings' style and elements in historical townscape formation areas and remaining resident's link and natural environment in the other historical villages. According to the evaluation of spatial aspect, those villages can be classified into 5 categories; building type, nature type, religion type, public structure type and low-evaluation type.

Keywords : historical environment, reconstruction village space, evaluation, autonomy, townscape formation area

歴史的環境、集落空間整備、評価、自治体、景観形成地区

1. 研究の背景と目的

集落地理学では、集落はその形態上の特徴から大きく「集村」と「散村」に分類される¹⁾。本研究における「歴史的集落地」とは、近世において町家が建ち並ぶ集村集落と定義している。このような、歴史的集落地には、合理性や経済性に基いた多くの新市街地とは異なる空間構成や、その総体として視覚的に現れてくる景観などの歴史的なポテンシャルがある。それ故に、現在、多くの歴史的集落地の町並みや景観が保存・保全の対象とされ、自治体の自主条例に基づく歴史的景観形成地区²⁾への指定や文化財保護法に基づく伝統的建造物群保存地区への選定が増加している（以下、歴史的景観形成地区と伝統的建造物群保存地区を合わせて「景観施策地区」と呼ぶ）。

そのような地区指定にあたっては、集落環境の価値のみならず、集落自体の重要性や住民の要望があるかどうか、合意形成が図れるかどうか、自治体職員に景観形成をしていく意思があるかどうか、集落環境が危機に瀕しているかどうかなどの様々な要素が働いていることは確かである。しかし、対象となる集落に評価できる環境がなければ、景観施策地区に指定されることはない。従って、現在指定されている景観施策地区は、何らかの環境評価フィルターを通し、篩にかけてきた結果であり、これらの地区は、その景観や環境が一

定の評価を得たが故に、将来の整備の方向性がある程度明確化されている地区であると言える。

しかし、歴史的に見ると、街道沿いや臨海部を中心に多くの歴史的集落が存在していたことは周知の通りであり、地区指定される地区は、それらのうちのごく一部でしかないのが実情である。その他の集落は、景観施策地区の現在の評価指標では抽出できない集落であり、現状のままでは「見過ごされ」「何の手立てもなく」変化に流されていってしまうことが容易に予想される（これらの集落を以下「見過ごされている集落」と呼ぶ）。

しかし、見過ごされている集落にも高く評価できる環境が存在していると考えられる。そして、それは景観施策地区のように手を加えて人工的に「形成」「保存」される空間ではなく、外的圧力の少なさ故に、自然に持続してきた空間や、生業や地縁といった人の営みに基づく住民に密接に関わるような環境であると考えられる。また、そこでの生活は、グローバルスタンダードに流されることなく、地域の作法に根ざしたものであるとも考えられる。地域住民が、そのような環境に誇りを持って持続的に生活していける集落でありうるためにも、見過ごされている集落の空間や環境を評価し、持続させていく必要があると考えられる。そのためには、これまでの景観施策地区において多く見られるような、観光化し、観光客のための視

* 大阪大学大学院工学研究科 博士後期課程・工修
** 大阪大学大学院工学研究科 教授・工博
*** 大阪大学大学院工学研究科 教授・工博
**** 大阪大学大学院工学研究科 講師・工博

Graduate Student, Graduate School of Engineering, Osaka University, M. Eng.
Prof., Graduate School of Engineering, Osaka University, Dr. Eng.
Prof., Graduate School of Engineering, Osaka University, Dr. Eng.
Lecturer, Graduate School of Engineering, Osaka University, Dr. Eng.

覚的な環境としての景観形成を重視した整備施策とは異なる新たなコンセプトの地域施策が必要であると考えられる。

以上の背景のもと、本研究では、見過ごされている集落の新たなコンセプトの地域施策の検討のための基礎的研究として、自治体の歴史的集落地に対する認識に着目し、見過ごされている集落の現状、集落環境の評価の実態、集落の今後の方向性を把握し、また、景観施策地区に対する既存評価指標との比較を通じ、歴史的集落地に対する新たな評価指標のあり方と見過ごされている歴史的集落地の今後の集落環境の持続に向けた方向性を考察することを目的とする。

本研究は、歴史的景観形成地区において策定されている景観形成ガイドラインのテキスト分析及び自治体に対するアンケート調査から成っている^{注2)}。具体的には、まず景観形成ガイドラインの前段部分における評価言語を抽出し、そのテキスト分析を行うことにより、これまでの歴史的景観形成地区の指定にあたって、どのような空間や環境が自治体から評価されてきたかを把握した。次に、アンケート調査結果の分析を通じ、見過ごされている集落の集落環境に対する現在の評価を明らかにし、歴史的景観形成地区に対する評価と比較を行うことにより、新たな評価指標のあり方を考察した。最後に、現在自治体職員が考えている各集落環境の今後の方向性や空間整備の方向性、空間整備時の問題点を明らかにしていくことにより、今後の集落環境の環境・空間整備の方向性の一端を検討した。

集落を包括的に扱った調査・研究には、藍澤らによる集落の立地類型別の地域資源から農村地域構造を明らかにし、今後の誘導方向性を示したもの²⁾や、杉本らによる大阪市内の古集落を対象とした空間変容の実態を明らかにしたもの³⁾などがある。また、兵庫県下の見過ごされた集落に対する研究としては徳勢らによる集落の潜在的特徴としての歴史的な人口、空間の形状、市街化状況と鉄道駅との関係を整理したもの⁴⁾がある。

2. 研究対象と方法

研究対象は早くから景観行政に取り組んできた兵庫県下の歴史的集落地とする。歴史的集落地の抽出にあたっては明治13年共武政表を用いた。共武政表とは、陸軍省参謀本部が徴発用台帳として編纂した軍事統計であり、そこに掲載されている集落は、人口100人以上の輻輳地^{注3)}とされている。兵庫県下には213集落が存在し

ていたことが記されている。213集落のうち景観施策地区としては、20集落が歴史的景観形成地区に指定されている(地区数は19地区)。伝統的建造物群保存地区としては、篠山町城下町地区の一部区域が、2004年12月に歴史的景観形成地区から移行・選定されているのみである。篠山町城下町地区も地区指定時は歴史的景観形成地区の指定基準に従っているため、以下、本研究の景観施策地区は歴史的景観形成地区と呼ぶこととしている。

残りの193集落のうち42集落に戦災復興及び震災復興の区画整理事業が導入されており歴史的集落地としての町の特徴はなくなっている。また90集落が市街化区域内^{注4)}にある。これらのいずれかに該当する93集落(39集落が重複)を除く100集落は、歴史的景観を現在まで持続させている可能性をもっているが、現在見過ごされている集落であると言える^{注5)}。

景観形成ガイドラインのテキスト分析は、歴史的景観形成地区19地区のうち、ガイドライン前段部分に地区の特徴や魅力が記されている17地区を対象に分析を行った^{注6)}。アンケート調査の対象は各集落が所在する58市町^{注7)}の都市・地域計画担当者とし、回収率82.8%にあたる48市町(表1参照)からの有効回答を得た。集落単位での調査票となっており、集落について見ると、100票配布し、回収率76.0%にあたる76票の有効回答を得た。アンケート調査の内容は大きく、①集落環境に対する評価、②今後の集落環境の方向性、③集落環境の抱える問題点などである。

3. 歴史的景観形成地区指定時の評価

景観形成ガイドラインは建物の個別更新の際の住民や業者に対する基準であり、その前段部分には「市町の概要」「地区の歴史や沿革」「地区の特徴や魅力」等が記述されている。そのうち、「地区の特徴や魅力」については、歴史的景観形成地区指定時における、その地区の特徴や魅力を、簡潔かつ明瞭に示している。また、地区内に多数存在する高く評価できる環境から、自治体がガイドラインに明記すべきと考えた環境が抽出されている。つまり、自治体はその地区で特に高く評価できると判断した環境が記載されていると言える。そこで、まず「地区の特徴や魅力」部分から地区を高く評価している文章を抽出した。抽出基準は、「〇〇が魅力づけている」等の魅力、「〇〇が重要である」や「〇〇が貴重である」等の重要性、「〇〇が

評価できる」等の評価、「〇〇が特徴である」や「〇〇が特徴付けている」等の特徴に関する語句を有する文章としている。その結果127の文章を抽出した。

それらの文章から229の評価対象となる言語を抽出した^{注8)}。それらを整理したものが図1である。評価対象言語は、まず「町並み」「景観」や「風土」「イメージ」「雰囲気」などの抽象的表現23言語と、具体的な評価事物を表した具体的表現206言語に分類できる。具体的表現については、さらに景観構成要素⁶⁾「モノ(建築物、土

図1 言語単位で見た歴史的景観形成地区指定時の評価傾向

図2 地区単位で見た歴史的景観形成地区指定時の評価傾向

木構建築物、自然物)」「人の活動・歴史性」による分類を行った。

その結果、「モノ(建築物)」が122言語(53.3%)と約半数を占めており、「モノ(土木構造物)」が37言語(16.2%)、「モノ(自然物)」が34言語(14.8%)と続いている。「モノ(建築物)」の中でも、「建築物要素」が69言語(30.1%)と多く、「単体建築物」が37言語(16.2%)と続いている。一方、「人の活動・歴史性」は12言語(5.2%)と少なくなっており、歴史的景観形成地区の評価指標は建築物が大きなウェイトを占めていることが分かる。

次に、それらの評価対象言語を地区単位で集計した^{注9)}ものが図2である。「単体建築物」については15地区(88.2%)、「建築物要素」は13地区(76.5%)、「群としての建築物」は9地区(52.9%)が地区の特徴であると評価しており、建築物の評価が高いことが分かる。また、「町割・道の形状」が10地区(58.8%)、「水路・石積み等」が9地区(52.9%)、「集落内自然」が8地区(47.1%)、「周辺自然」が9地区(52.9%)と、土木構造物や自然物についてもいずれも半数近くの地区が高く評価している。一方、「祭り・イベント」「生業・産業活動」は共に3地区(17.6%)と低くなっている。全体的に、空間要素であるハード面に対する評価が高く、人の活動などのソフト面については高い評価は見られないことが分かる。以上より、空間、特に建物に対する評価が基本的に必要であり、それに付随した形で人の活動や歴史性の評価があるという構造があると考えられる。

4. 見過ごされている集落の評価

4-1. 対象集落の現状

見過ごされている集落100集落のうち、アンケート調査の回答を得た76集落の概要を表1に示す。都市計画については、市街化調整区域が13集落(17.1%)、非線引き白地の都市計画区域が36集落(47.4%)、都市計画区域外が27集落(35.5%)と非線引き白地の都市計画区域がほぼ半数を占めている。人口変化率については、明治13年共武政表に記載されているデータと、平成12年国勢調査のデータ^{注10)}を比較している。人口が増加している集落が34集落(44.7%)、減少している集落が42集落(55.3%)とやや減少している集落が多いことが分かる。周辺の市街化状況については、図3

に示す4タイプの変容状況が存在した。現在の1/25000の地形図をもとに、現地踏査時の集落の状況も加味し分類を行った。その結果、維持型が31集落(40.8%)と最も多く、散点拡大型の27集落(35.5%)、縮小型の9集落(11.8%)、市街拡大型9集落(11.8%)であった^{注11)}。

アンケート調査により、従来の

(*)「散点拡大型」とは周辺にまばらにスプロールしているタイプである

図3 集落周辺の市街化と集落の変容タイプ

表1 調査対象集落の概要と調査票配布先

No.	集落名	調査票配布先	都市計画	周辺の市街化状況	人口変化率	住民活動
1	上野村		調整区域	縮小型	▲0.07	-
2	廣根村	猪名川町	調整区域	縮小型	▲0.07	-
3	福住村	篠山市多紀支所	非線引白地	維持型	▲0.13	-
4	八上上村		非線引白地	縮小型	▲0.11	-
5	八上内村	篠山市城東支所	非線引白地	縮小型	▲0.48	-
6	八上下村		非線引白地	縮小型	▲0.46	-
7	宮田村	篠山市西紀支所	非線引白地	散点拡大型	0.57	○
8	波賀野新田村		非線引白地	維持型	▲0.17	-
9	迫入村	篠山市丹南支所	非線引白地	維持型	▲0.69	-
10	古市村		非線引白地	維持型	▲0.31	-
11	柏原町	丹波市柏原支所	非線引白地	市街拡大型	▲0.44	○
12	黒井村	丹波市春日庁舎	非線引白地	市街拡大型	1.40	-
13	園領村		非線引白地	維持型	▲0.12	-
14	遠坂村	丹波市青垣支所	都計区域外	縮小型	▲0.52	-
15	香美	香美町	都計区域外	市街拡大型	1.72	-
16	一日市		都計区域外	散点拡大型	0.54	-
17	村岡町	香美町村岡地域局	都計区域外	維持型	▲0.27	○
18	竹野	豊岡市竹野総合支所	非線引白地	維持型	0.11	-
19	久畑村	豊岡市但東総合支所	都計区域外	維持型	▲0.43	-
20	殿治屋村	豊岡市出石総合支所	非線引白地	散点拡大型	1.12	-
21	日置村		非線引白地	市街拡大型	▲0.31	-
22	伊福村		非線引白地	維持型	▲0.14	-
23	土居村	豊岡市日高総合支所	非線引白地	維持型	▲0.43	-
24	手邊		非線引白地	散点拡大型	▲0.33	-
25	八木村		非線引白地	維持型	0.15	○
26	網埴村		非線引白地	維持型	▲0.04	-
27	高柳村		非線引白地	散点拡大型	▲0.03	-
28	上小田村		非線引白地	散点拡大型	0.58	-
29	大屋市場村	養父市大屋地域局	都計区域外	散点拡大型	1.09	-
30	関宮村	養父市関宮地域局	都計区域外	散点拡大型	0.79	-
31	高田村	朝来市	非線引白地	維持型	▲0.31	-
32	矢名瀬町	朝来市山東支所	都計区域外	市街拡大型	▲0.01	○
33	岩津村		都計区域外	縮小型	▲0.71	-
34	山口村	朝来市朝来支所	都計区域外	維持型	0.25	-
35	立脇村		都計区域外	維持型	0.37	○
36	濱坂村		非線引白地	市街拡大型	0.36	○
37	藤崎村	浜坂町	非線引白地	維持型	▲0.44	-
38	居組村		非線引白地	維持型	▲0.34	-
39	中村町		非線引白地	散点拡大型	1.11	○
40	殿治屋村	中町	非線引白地	散点拡大型	1.13	○
41	安楽町		非線引白地	散点拡大型	0.53	○
42	福原村	加美町	都計区域外	維持型	▲0.24	○
43	喜多村	黒田庄町	都計区域外	散点拡大型	0.43	○
44	比延村	西脇市	調整区域	散点拡大型	0.54	-
45	栗賀町村	神崎町	都計区域外	散点拡大型	0.69	○
46	福本村		都計区域外	維持型	0.10	○
47	屋形村		都計区域外	維持型	▲0.00	-
48	西川邊村	市川町	都計区域外	散点拡大型	1.30	-
49	甘地村		都計区域外	散点拡大型	0.67	-
50	西田原村内井ノ口	福岡町	調整区域	維持型	▲0.10	-
51	豊富村内太尾	姫路市	調整区域	散点拡大型	0.43	-
52	六九谷村		調整区域	維持型	▲0.34	-
53	新在家村		調整区域	縮小型	▲0.41	-
54	原村	揖保川町	調整区域	維持型	▲0.12	-
55	千本村	新宮町	都計区域外	散点拡大型	▲0.24	-
56	型ヶ原村	上郡町	調整区域	維持型	1.01	-
57	入野村	相生市	調整区域	縮小型	0.13	-
58	東蓮田村	三木市	調整区域	維持型	0.80	-
59	小田村	小野市	都計区域外	散点拡大型	1.38	-
60	栗生村		調整区域	散点拡大型	0.50	-
61	天神村	東条町	非線引白地	散点拡大型	0.86	○
62	大門村	社町	調整区域	維持型	▲0.25	-
63	久崎村	上月町	都計区域外	散点拡大型	▲0.00	○
64	安志村	安富町	都計区域外	散点拡大型	0.53	○
65	千草村	穴栗市千草市民局	都計区域外	散点拡大型	0.85	○
66	三方町村	穴栗市一宮市民局	都計区域外	維持型	▲0.04	-
67	岩屋浦	淡路市岩屋総合事務所	非線引白地	市街拡大型	0.33	-
68	都賀村	淡路市一宮総合事務所	都計区域外	散点拡大型	▲0.57	-
69	垂井村	淡路市一宮総合事務所	都計区域外	維持型	▲0.49	-
70	飯屋浦	淡路市東浦総合事務所	非線引白地	維持型	▲0.81	-
71	志筑村	淡路市津名総合事務所	非線引白地	市街拡大型	0.25	-
72	塩田浦		非線引白地	維持型	▲0.51	-
73	津村	南あわじ市西淡庁舎	非線引白地	散点拡大型	▲0.01	-
74	渡田村	南あわじ市緑庁舎	非線引白地	散点拡大型	▲0.17	-
75	沼島浦	南あわじ市南淡庁舎	都計区域外	維持型	▲0.82	-
76	福良浦		非線引白地	市街拡大型	0.16	-

図4 集落に生じている変化と最も問題と思われる変化

自治会活動ではなく、まちづくりに関わる新たな住民活動が行われているかどうかを尋ねた結果、18 集落 (23.7%) で新たな住民活動が行われていることが明らかとなった。活動内容は、まちづくり協議会の設置による活動が 5 集落、緑化活動が 3 集落、イベント活動が 3 集落などと多様であった。

また、集落において現在生じている変化を尋ねた結果を図 4 に示す。「人口減少」が 86.8%、「高齢化」が 96.1%など、現在多くの遠隔地集落で生じている問題を同様に抱えていることが分かる。また、空間的な変化としては、「石垣・水路のコンクリート化」が 77.6%、「古い建物のプレハブ化・洋風化」が 71.1%、「敷地前面に自動車が並ぶ」が 67.1%と多く挙げられている。また、「家々が扉を開き開放感がなくなった」も 75.0%と多くなっているが、「近所づきあいの減少」、「近隣組織の解体」はそれぞれ 29.0%、19.7%と少なくなっており、住民間のつながりは持続しているが、空間としては家々が扉を開めることなどによる開放感の喪失が生じていることが分かる。これはモータリゼーションの進展によって他地域からの来訪者が来やすくなっていることに起因する不安感の増大や生活様式や建物の建て方の変化などが影響していると予想される。

4-2. 見過ごされている集落に対する評価の現状

見過ごされている集落において、集落を特徴付ける環境としてどのような集落環境が持続しているか、また、特に高く評価できる環境は何か (3 つまで選択) を尋ねた結果を図 5 に示す。以下、前者を「特徴環境」、後者を「重要環境」と呼ぶこととする。

特徴環境については「伝統的祭りや新しいイベント (72.4%)」「昔からの住民のつながりや組織 (68.4%)」といったソフト面での人のつながりが多く挙げられている。「その他」は「史跡」が 1 票、「現在でも屋号で呼び合っている」が 1 票であった。一方、空間的要素に着目すると、「集落の背景となる山並みや川 (65.8%)」「集落内の神社や家々の巨樹や豊かな緑 (53.9%)」の自然や、「寺の大屋根や神社の社殿など (44.7%)」「地域住民によく管理されている地蔵や祠 (43.4%)」の景観上ポイントとなる、また信仰対象となる要素、「住民が集まれる神社境内や集落内の小空地など (46.1%)」などが特徴環境として多く挙げられている。「町家や蔵などの歴史的な様式の建築物」は 26.3%であるのに対し、「群としての歴史的建築物」は 1.3%と少なく、多くの地域で歴史的な建造物は点在している程度であることが分かる。

重要環境についても、「伝統的祭りや新しいイベント (57.9%)」「昔からの住民のつながりや組織 (52.6%)」といったソフト面に対する評価が高いことが分かる。また、空間的要素に着目すると、「集落の背景となる山並みや川 (35.5%)」「集落内の神社や家々の巨樹や豊かな緑 (23.7%)」が多く挙げられている。

全体的に特徴環境と重要環境は同様の傾向を示していることが分かる。しかし、「道端の野草などの小さな緑」は特徴環境としては 25.0%の回答があるのに対し、重要環境では 2.6%と低い値となっている。このことより、「道端の野草などの小さな緑」は、集落環境を特徴付けてはいるが、重要であるという認識はされにくい要素であると考えられる。

図 5 見過ごされている集落の高評価環境

表 2 空間に対する評価項目

「3. 歴史的景観形成地区指定時の評価」でみた歴史的景観形成地区の評価項目と比較すると、歴史的景観形成地区について物的環境であるハード面、特に建物に対する評価が高いのに対し、見過ごされているまちでは、住民のつながりなどのソフト面が高くなっている。形成地区は空間要素・物的要素が多いことが分かる。以上より、新たな評価指標のひとつの方向性として、「建物によらないこと」「自然的要素やソフト面を重視していくこと」が考えられる。

番号	空間評価項目
A	群としての歴史的建築物
B	町家や蔵などの歴史的な様式の建築物
C	屋根や壁面、開口部などの歴史的な建築物要素
D	寺の大屋根や神社の社殿など
E	伝統産業や生業を表す建築物や構造物
F	建物の配置・並び方による景観の連続性や変化
G	まっすぐでない道、幅員の異なる道などの自然な道の形状
H	敷地の形状や規模
I	道沿いに続く生垣・石垣
J	道沿いの石積みの水路や洗い場
K	階段や坂道、敷地の段差など
L	住民が集まれる神社境内や集落内の小空地など
M	集落内の神社や家々の巨樹や豊かな緑
N	道端の野草などの小さな緑
O	集落の背景となる山並みや川
P	地域住民によく管理されている地蔵や祠

5. 見過ごされている集落の今後の可能性

次に、実際の集落環境の中でも特に空間整備の方向性を探るために、空間評価に着目して分析を行う。

5-1. 空間に対する評価による類型化

4-2 の特徴環境のうち、表 2 に示す空間に対する評価の 16 項目に着目し、集落の類型化を行った。類型化にあたっては、まず、各空間評価項目に対する評価を変数とし、数量化Ⅲ類を行った (図 6)。図 6 のカテゴリ分布図を見ると、第 1 要因の正方向には J の石積みの水路や洗い場や K の階段や坂道、敷地の段差、I の生垣や石垣などの土木的要素が位置し、負方向には C の歴史的な建築物要素、F の建物の配置、B の歴史的な様式の建築物など、建築的要素が位置していることから、第 1 要因は、「土木物評価－建築物評価」を示していると考えられる。第 2 要因の正方向には、E の伝統産業や

生業を表す建築物や構造物、Mの神社や家々の巨樹や豊かな緑、Pの地蔵や祠といった人間の営み（人的環境）に関わるが分布し、負方向にはCの歴史的な建築要素やFの建物の配置、Hの敷地形状や規模といった物的環境に関わる要素が分布している。従って、第2要因は「人的環境評価－物的環境評価」を示していると考えられる。

次に、算出されたサンプルスコアをもとにクラスター分析（spss11.0J、ウォード法、平方ユークリッド距離）を行い、76集落を以下の5類型に分類した。類型別の評価される集落空間を図7に示す。図7より、各類型は以下のような特徴を有していることが分かる。

- ・類型Ⅰ（5集落）：Bの歴史的様式の建築物とFの建物の配置や並び方がこの類型の全集落で評価されている。また、Cの歴史的建築物の様式が3集落（60.0%）と続いており、集落内の建築物に対する評価が高い類型と言える。建物評価を重視する歴史的景観形成地区への指定の可能性をもっていると考えられる。
- ・類型Ⅱ（21集落）：Oの背景となる山並みや川が90.5%と最も高く評価され、Mの神社や家々の巨樹や豊かな緑が76.2%と続いており、集落内外の自然環境に対する評価が高い類型と言える。
- ・類型Ⅲ（12集落）：Lの神社境内や集落内の小空地がこの類型の全集落で評価されており、Mの神社や家々の巨樹や豊かな緑が91.7%、Pの地蔵・祠とDの寺の大屋根や神社の社殿が共に83.3%と続いている。このように、信仰対象物が高く評価されている類型と言える。
- ・類型Ⅳ（8集落）：Gの自然な道の形状、Kの階段や坂道・敷地の段差、Lの神社境内や集落内の小空地がこの類型の全集落で評価

されている。またJの石積みの水路や洗い場も62.5%と、他類型に比べ多くの集落が評価されており、土木物に評価が高い類型であると言える。

- ・類型Ⅴ（30集落）：他類型に比べ全体的に空間に対する評価の低い類型であると言える。30集落（39.5%）と最も多くがこの類型に属しており、見過ごされている集落には、空間的には評価されにくい集落が多いことが分かる。

以上の各類型の特徴をもとに、以下、類型Ⅰを「建物評価型」、類型Ⅱを「自然評価型」、類型Ⅲを「信仰評価型」、類型Ⅳを「土木物評価型」、類型Ⅴを「低評価型」と呼ぶこととする。各類型のサンプル分布図を図8に示す。

5-2. 今後の集落環境全体的な方向性

今後の方向性を集落人口、集落環境に分けて聞いた結果を集落類型別に示したものが表3である。全体的に見ると、人口では「現在の人口を維持する」が35.5%と最も多く、空間では「生活文化の豊かな地区」が35.5%と最も多くなっている。これは4-2における「伝統的祭りや新しいイベント」や「昔からの住民のつながりや組織」に対する高評価に即した結果となっている。

類型別に見ると、建物評価型は、集落人口では「一時滞在者を増やす」が3集落（60.0%）、集落環境についても「歴史的な地区」が3集落（60.0%）となっており、歴史的な建物を活かした観光地という方向性が伺える。自然評価型は、集落人口では「現在の人口を維持する」が38.1%、集落環境では「生活文化の豊かな地区」が42.9%と多くなっている。信仰評価型は、集落人口では、「現在の人口を維持する」と「特に考えていない」が共に33.3%と多く、集落

- * 1. 図中の記号は表2と対応している
* 2. 「A: 群としての歴史的建築物」は回答が1自治体のみであったため、「B: 町家や蔵などの歴史的な様式の建築物」で代替し、数量化Ⅲ類を行ったため、図中に表れていない。

図6 カテゴリー分布図

図8 サンプル分布図

図7 空間評価類型別にみた見過ごされている集落の高評価空間

- * 図中の記号は表2と対応している

表4 空間整備の希望

類型名	環境美観 化	景観・水 環境の 整備	道路幅員 や形状を 残す	水路や石 組み、洗 い場を残 す	建物を修 景し歴史 的町並み を形成	街灯やサ イネの修 景	集落内の 自然環境 を維持	緑植えに よる緑化	地形の きめ細か さを維持	背景の山 並みや川 を保全	小公園や 広場の整 備	地域拠点 や環境 整備	景観上ポ イントと なる建 物の保全	上下水道 などの生 活基盤の 整備	特にな い
建物評価型	0.0	0.0	20.0	0.0	60.0	40.0	0.0	20.0	0.0	40.0	0.0	80.0	80.0	0.0	0.0
自然評価型	14.3	28.6	4.8	4.8	0.0	19.0	42.9	38.1	0.0	66.7	33.3	14.3	19.0	19.0	9.5
信仰評価型	0.0	0.0	8.3	25.0	8.3	41.7	25.0	0.0	9.2	41.7	50.0	16.7	25.0	8.3	50.0
土木物評価型	25.0	25.0	50.0	37.5	12.5	12.5	50.0	62.5	0.0	62.5	12.5	12.5	50.0	12.5	12.5
低評価型	13.3	6.7	10.0	10.0	10.0	10.0	30.0	30.0	0.0	23.3	20.0	20.0	30.0	13.3	20.0
合計	11.8	13.2	13.2	13.2	10.9	14.5	35.5	34.2	1.3	43.4	26.3	19.7	30.3	13.2	19.7

(*)単位は%

表3 今後の集落全体的な方向性(人口・環境)

類型名	集落人口について				集落環境について			
	定住人口 を増やす	一時滞在 者を増やす	現在の人 口を維持 する	特に考 えてい ない	歴史的な 地区	自然豊 かな地区	生活文化 の豊かな 地区	地域拠点 としての 中心地区
建物評価型	0.0	60.0	0.0	40.0	60.0	0.0	20.0	20.0
自然評価型	33.3	0.0	38.1	28.6	9.5	19.0	42.8	4.8
信仰評価型	25.0	8.3	33.3	33.3	16.7	16.7	16.7	8.3
土木物評価型	37.5	37.5	12.5	12.5	25.0	50.0	0.0	12.5
低評価型	23.3	10.0	46.7	20.0	23.3	6.7	40.0	10.0
合計	28.3	13.2	35.5	25.0	19.7	13.2	35.5	7.9

(*)単位は%

環境についても「特に考えていない」が41.7%と多く、集落の今後の方向性が定まっていない状況の集落が多いと考えられる。土木物評価型は、集落人口では「定住人口を増やす」と「一時滞在者を増やす」が共に37.5%と多くなっている。集落環境については「生活文化の豊かな地区」が50.0%と多くなっている。低評価型は、集落人口では「現在の人口を維持する」が46.7%と多く、集落環境では、「生活文化の豊かな地区」が40.0%と多くなっている。

5-3. 空間整備の希望

空間整備の希望を尋ねた結果(複数回答)を集落類型別に示したものが表4である。全体的に見ると、「背景の山並みや川を保全(43.4%)」「集落内の自然環境を維持(35.5%)」「緑植えによる緑化(34.2%)」など自然環境を保全・形成するための整備希望が多い。

類型別に見ると、建物評価型は、「建物を修景して歴史的な町並みを形成」、「景観上ポイントとなる建物や緑の保全」、「地域拠点や環境拠点施設の整備」がいずれも3集落(60.0%)となっており、地区の特徴のひとつとしての建物を活かした観光化という志向が伺える。自然評価型は、「背景の山並みや川を保全」が66.7%「集落内の自然環境を維持」が42.9%、「緑植えによる緑化」が38.1%と自然環境の保全・形成が多く挙げられている。信仰評価型は、「小公園や広場の整備」が50.0%、「集落内の自然環境を維持」と「背景の山並みや川を保全」が共に41.7%と高くなっているが、「特にない」が50.0%と半数を占めており、他類型に比べ空間整備に対する希望が低いことが伺える。これは5-2で集落人口、集落環境の今後の方向性が定まっていない集落が多かったこととも関係していると考えられる。土木物評価型は、「背景の山並みや川を保全」と「緑植えによる緑化」が共に62.5%と高く、自然要素に対する整備希望が高くなっている。また、他類型と比較すると「道路幅員や形状を残す(50.0%)」や「水路や石組み、洗い場を残す(37.5%)」といった土木構造物に対する空間整備希望が高く、類型の特徴を表していると言える。低評価型は、突出した項目はないが、「集落内の自然環境を維持」、「緑植えによる緑化」、「景観上ポイントとなる建物や緑の保全」がいずれも30.0%とやや高くなっており、自然環境の保全形成に関する空間整備希望がやや高くなっていることが分かる。また、空間整備希望が「特にない」のものも20.0%とやや多くなっている。

5-4. 空間整備時の問題

今後、空間整備を行っていく際に問題となると思われることを尋ねた結果を図9に示す。「財政的な余裕がない」が77.6%と突出し

図9 今後の空間整備時に予想される問題点

て多く、「目標となる建物の規範がない」が32.9%、「住民の理解不足」が28.9%と続いている。これは、街並み環境整備事業などの既存の空間整備事業は、事業導入の際の要件や助成金の使

途に対する縛りが強かったことも原因であると考えられる¹²⁾。2004年には、地方の自由度の高い計画支援制度であるまちづくり交付金も創設されたが、このような使途を制限せずに利用できる柔軟な助成制度をより充実させていく必要があると考えられる。

6. 結論

本研究より明らかとなったことは、以下の通りである。

- ①歴史的景観形成地区の指定の際に評価される環境は、建物などのハード的な要素であった。一方、見過ごされている集落で評価できる環境は、祭りやイベント、住民のつながりなどのソフト面であり、空間に着目して見ると、山並みや集落内自然などの自然が多く評価されていることが明らかとなった。
- ②見過ごされている集落の空間評価をもとに、集落の類型化を行うと「建物評価型」「自然評価型」「信仰評価型」「土木物評価型」「低評価型」の5類型に分類できた。
- ③集落の今後の方向性について、類型ごとに以下のようにまとめられる。
 - ・「建物評価型」：歴史的な建物を活かした観光地という方向性をもっているものが多く、空間整備の希望も建物の修景や景観上ポイントとなる建物や緑の保全が多い。このタイプの集落は、歴史的景観形成地区と同傾向の環境評価を示しており、地区指定の可能性をもっていると考えられる。
 - ・「自然評価型」：現在の人口を維持したまま、生活文化の豊かな地区にしていきたいという集落が多い。空間整備の希望としては、緑植えなどでの緑化を進め、集落内外の自然環境を保全していくという方向性をもつ集落が多い。
 - ・「信仰評価型」：集落人口、集落環境共に特に考えていないという集落が多い。また、空間整備の希望も特にもっていない集落が多く、自治体職員が今後の方向性をもっていない類型である。
 - ・「土木評価型」：定住人口及び一時滞在者を増やした生活文化の豊かな地区という方向性をもつものが多い。空間整備の希望は、自然要素及び道路幅員や形状の維持、水路や石組み、洗い場の維持といった土木構造物に対する整備希望が多い。
 - ・「低評価型」：現在の人口を維持し、生活文化の豊かな地区にしていきたいという方向性をもつものが多い。空間整備の希望は自然環境の保全・形成に関わるものがやや高く、特に考えられていない集落もやや多い。

④今後の空間整備にあたっては、財政的な余裕がないことが最も問題となってくることが明らかとなった。

4-1で示したように、現在、従来の自治会活動ではなく、まちづくりに関わる新たな住民活動が行われている集落も増えてきている。しかし、住民がその集落価値に気付かず、住民活動を起こさないような集落では、現行法制度に従い、何の手立てもなく変化に流され、その価値が消失してしまう恐れもある。そのような地区に対しては、一つの方向性として自治体が施策を持ち出し、自治体为主导していくことも必要であると考えられる。自治体職員の空間評価による見過ごされている集落の分類において、低評価型の集落が多く存在していたように、その空間的価値を自治体職員が認識していない集落も多く存在していることは事実である。しかし、中には空間的価値が高く評価されている集落も存在しており、そこには大きく建物、土木物、自然、信仰対象という4つの方向性が見られた。従って、これまでの建物を主とした空間施策に加え、新たな空間施策のコンセプトとして土木物、自然、信仰対象を主な評価対象としていくことが重要であると考えられる。

また4-2で示したように、多くの集落で昔からの住民のつながりが評価されており、新たな地域施策を考えていく際には、このような住民のつながりを持続させていくことも併せて考えていく必要がある。このことは、新たな地域施策・空間施策を実施していく際の住民合意形成などにおいても大きな役割を果たすことも期待できる。

本研究は、これまで特段位置づけのなかった集落環境のひとつの方向性を示すという点で有用であると考えられる。しかし、この結果は自治体職員による集落評価に基づいているため、ひとつの方向性に過ぎないことは事実である。今後は、本研究の成果をもとに、また、本研究では扱わなかった歴史性や立地などの集落自体のもつポテンシャル等も考慮した上で対象を絞り、より詳細な空間調査を行う予定である。

注

注1) 歴史的な景観の形成を目的とした景観形成地区等を「歴史的景観形成地区」と呼んでいる。

注2) 見過ごされている集落の方向性を検討するにあたっては、歴史的景観形成地区への指定以前の集落環境の評価を把握する必要がある。しかし、指定後年数が経過しており、現在の自治体職員の評価では、正確に過去の集落環境の評価がされるとは考え難い。従って、歴史的景観形成地区指定時の自治体の集落環境に対する評価として景観形成ガイドラインを使用している。

注3) 参考文献5)によると、幅狭地とは軒を連ねて屋敷が接する密集集落地である。

注4) 市街化区域は、市街化を促進する地域であり、開発圧力も強く、集落の置かれている状況が異なり、集落環境・空間の変化も激しいと予想される。また、非線引き用途区域は、白地地域よりも開発圧力が強い等の背景から用途が指定されており、自治体が集落の今後に対する明確なビジョンを有していると考えられる。従って、市街化区域内及び非線引き用途区域内の集落は見過ごされている集落とは呼び難いと判断し、調査対象から除外している。

注5) 歴史的景観形成地区等に指定されるなど、自治体から注目される集落と見過ごされている集落の特徴(歴史的人口、集落面積、集落形状、集落の種類等)の比較は参考文献4)に示されている。

注6) テキスト分析の対象とした歴史的景観形成地区17地区は、①出石町城

下町地区、②龍野市龍野地区、③城崎町城崎温泉地区、④篠山町城下町地区、⑤御津町室津地区、⑥生野町口銀谷地区、⑦和田山町竹田地区、⑧大屋町大杉地区、⑨八鹿町八鹿地区、⑩尼崎市寺町地区、⑪伊丹市旧大坂道都市景観形成道路、⑫伊丹市北少路村都市景観形成道路、⑬伊丹市旧西国街道都市景観形成道路、⑭伊丹市多田街道都市景観形成道路、⑮赤穂市坂越市街地景観形成地区、⑯赤穂市お城通り地区、⑰宝塚市旧小浜宿景観形成地域である。歴史的景観形成地区にも様々なタイプが存在するが、歴史的な景観形成を目指す地区のまとまりとしての全体的な傾向を把握するものである。

注7) より詳しく集落の現状を把握できる行政組織レベルを考慮し、合併以前の旧市町の範囲(支所レベル)を対象とした。

注8) 「〇〇が魅力的である」での「〇〇」に当たる直接評価対象となる言語に加え、間接評価対象となる「〇〇」の構成要素を表す言語も抽出している。

注9) 対象とする歴史的景観形成地区17地区について、各カテゴリーに該当する評価対象言語数に関係なく、そのカテゴリーが評価されているかどうかで集計である。

注10) 国勢調査に町丁目のデータが掲載されていない集落については、平成17年の住民基本台帳データを使用している。

注11) いずれの「市街地大型」も大規模な連担市街地に取り込まれるものではなく、孤立型の市街地周辺へ拡大したものである。そのため、集落内の空間構造に大きな影響を与えるものではないと判断し、調査対象に含めている。

注12) 2005年4月に自治体ヒアリング調査を行った際に得た情報である。

参考文献

- 1) 木内信蔵、藤岡謙二郎、矢嶋仁吉編、「集落地理講座1総論」,朝倉書店p2-3,1957.9
- 2) 壺澤宏、保住秀樹、山下仁、小出良純: 集落地類型からみた地域資源構造と集落誘導の方向性, 日本建築学会計画系論文集, No.484, pp.137-146, 1996.6
- 3) 杉本容子、嶋海邦碩: 大都市市街地内における「古集落」の変容に関する研究, 日本都市計画学会学術研究論文集, No36, pp.505-510, 2001.11
- 4) Takahiko TOKUSE, et al.: A STUDY ON THE FEATURE OF OBSERVED TOWNS AND OVERLOOKED TOWNS -FOCUSED ON THE TOWNS WHICH EXSISTED MEIJI ERA-, Proceedings International Symposium on City Planning, 2004, pp.197-206, 2004.9
- 5) 宮本常一, 「町のなりたち」, 株式会社未来社, p26, 1968.2
- 6) 建築・まちなみ景観研究会, 「建築・まちなみ景観の創造」, 技法堂出版株式会社, p16, 1994.1

(2005年7月10日原稿受理, 2006年2月9日採用決定)